

## Alan Bennett のささやかな世界： *The Lady in the Van*

岡野 浩史\*

A Small World of Alan Bennett: *The Lady in the Van*

Koshi Okano \*

*Received October 29, 2003*

1969年10月ごろのことである。Alan Bennettは奇妙な老女がCamden Town にいるのに気がつく。彼女は路上駐車のコツ車——バン (van) ——に住んでいる。ベネットがはじめて目撃したのは、カムデン・タウンの通りを上ったところにある修道院の近くで止まってしまったバンのそばに立っている姿である。やせて背が高く6フィートはある。ゴルフ帽をかぶり、油だらけのレインコートに黄色のスカート、足にはスリッパを履いていた。彼女はバンの中にいないときは、Williams & Glyn'sという銀行の前の舗道に陣取り、店開きをしている。そこで売っているものは、論文めいたキリスト教に関するものである。たとえば、'True View: Mattering Things'といった題がつけられている。そして、その論文のメッセージが、舗道に簡単に書かれている。'St Francis FLUNG money from him'という具合である。彼女はカトリック教徒である。銀行に来る人たちは、そのメッセージをまたがないと銀行には入れない。また、彼女は鉛筆も売っている。ベネットにこういうことを言う。'A gentleman came the other day and said that the pencil he had bought from me was the best pencil on the market at the present time. It lasted him three months. He'll be back for another shortly.' このような彼女の話をもベネットが隣人にすると、その隣人はこういう質問をしてくる。'Tell me, is she a genuine eccentric?'

この老女の名はMiss Mary Shepherdという。少なくとも彼女はそう称している。この数年後、彼女は、そのおんぼろのバンをアラン・ベネットの庭に移動する。そして、1989年4月に彼女が死ぬまでそこに住むことになる。 *The Lady in the Van* (1989) はアラン・ベネットのミス・シェパードとの交流の記録である。

ベネットは当代を代表するイギリスの劇作家だが、ここで扱う *The Lady in the Van* は劇ではなくノンフィクションである。<sup>(1)</sup> ベネットはミス・シェパードとの20年近くに渡る係わり合いの中から、彼女の言動を記録していく。量は決して多くはない。1年に1回しか記録が出てこないのがふつうである。たとえば、1969年は1回、1970年も1回、1971年は2回、1972年

---

\* 外国語学部  
Faculty of Foreign Languages

は1度も記録が残されていない。1973年は1回といった具合で最後の1989年までいく。そこに記録されているものは、小説とはちがう実生活の記録だから、一貫性のあるものではない。読者は、いわば断片的なベネットの記録からミス・シェパードという人間を少しずつ作り上げていく。ベネットは淡々と事実を積み上げていく。時折、ベネット自身のことが語られる。

*The Lady in the Van*の最初のページには次のようなエピソードが書かれている。ヘビにあったと言っているのはミス・シェパード、そして、語り手はもちろんアラン・ベネットである。

'I ran into a snake this afternoon,' Miss Shepherd said. 'It was coming up Parkway. It was a long, grey snake - a boa constrictor possibly. It looked poisonous. It was keeping close to the wall and seemed to know its way. I've a feeling it may have been heading for the van.' I was relieved that on this occasion she didn't demand that I ring the police, as she regularly did if anything out of the ordinary occurred. (7) <sup>(2)</sup>

私たちは、これを読みながら、少々誇大妄想狂のこっけいな女性を思い浮かべる。こういう女性とかかわりあいになると厄介である。ミス・シェパードは実際厄介な女性なのである。愛すべき性格というのでは決してない。むしろ逆の面が強いと言っている。ベネットは1971年に彼女の動かなくなったバンを押してやったときの体験を書いている。

ミス・シェパードがAlbany Streetの近くで止まっている。困っていると思ったので、ベネットはバンを押してやる。ミス・シェパードは片手でハンドルを操りながらもう一方の手をじつに優雅に振りながらベネットに指示を出していく。だいぶ慣れていくらしきものごとである。他の車の通行のじゃまになりながらも何とかオルバニーストリートまで押して行ってやる。やれやれと思って押すのをやめると、ミス・シェパードは、ここではない、オルバニーストリートの反対の突き当たりまでだと言う。そこまではさらに1マイル以上もある。ベネットは腹を立て、彼女とバンをそのままにして立ち去ろうとする。

But I had had enough by this time and left her there, with no thanks for my trouble. Far from it. She even climbed out of the van and came running after me, shouting that I had no business abandoning her, so that passers-by looked at me as if I had done some injury to this pathetic scarecrow. 'Some people!' I suppose I thought, feeling foolish that I'd been taken for a ride (or taken her for one) and cross that I'd fared worse than if I'd never lifted a finger, these mixed feelings to be the invariable aftermath of any transaction involving Miss Shepherd. One seldom was able to do her a good turn without some thoughts of strangulation. (11)

「絞め殺してやりたい」——そう思われずにはいられないほど、こちらの親切に対して、上にも見られるように、ミス・シェパードは論外の反応を示すことがある。'Are you all right?'と心配して声をかけたらステッキで追い払われた人もいる。ベネットは言う。Miss S is never easy to help. (18) できることならかわらないほうが賢明な人物なのである。

しかし、そのうちにミス・シェパードのバンがベネットの家の真向かいに止まったきりになる。すると、ベネットは、ミス・シェパードが様々ないたずらやいやがらせを受けるのを目撃することが次第に多くなっていく。特に夜がひどい。突然、スポーツカーが、ミス・シェパードのバンの横に止まる。車から若者の男女連れが出てきてバンの横をがんとたたき、さらに懐中電灯でバンの中をのぞいて「魔女」の様子をうかがおうとする。ベネットがどなりつけ

るとあわてて逃げていく。警官ですら、夜の巡回の退屈をまぎらすためにミス・シェパードの平安を妨げたりする。ひどいときには酔っ払いがバンのガラスを割り、ミス・シェパードは顔に傷を負う。昼間でも子供たちが彼女をしばしばからかいの対象とし、また、路上に店を出している商売人たちが彼女をあからさまに迫害したりする。とうとうベネットは、自分の家の前庭に簡単な小屋を建てて、よかったら、来るようにと申し出る。もちろん、ミス・シェパードは簡単にそれに応じたりはしない。しかし、結局、来るようになる。そのうちに法律が厳しくなり彼女は路上駐車の中では暮らすことができなくなる。そして、ついにポンコツのバンがベネットの家の前庭に常時置かれ、彼女はそこで暮らすこととなるのである。ベネットが申し出てから3年ほどたった。1974年春のことである。

ミス・シェパードは、人とほとんどかかわりを持たない。ベネットとの関係でも決して親密になるということはない。打ち明け話をするようなことはまずない。偏屈である。基本的には一人の生活であり、車の中ではよくラジオを聞いている。しかし、車のそばに少しでも人の気配を感じたりするとすぐにラジオを切り、じっと息をひそめて様子をうかがう。自分だけだということが確認できるとまたラジオを聞き始める。突然車の中からベネットの家の訪問客——必ず彼女のバンの横を通らなければならない——に声をかけたりすることがある。だが、それは、たとえば、話し声がうるさいときに叱責するためである。ときどき、車の後部をあけて座り、あしをぶらぶらさせていることがある。そこで誰かが中を少しでものぞこうとすれば、すぐにドアをしめてこもってしまう。

しかし、そんな彼女でも当然ベネットとの最低限のかかわりは避けられない。時がたつにつれて少しずつミス・シェパードについていろいろなことがわかってくる。たとえば、彼女は政治に対して少なからぬ関心を抱いている。政治家に手紙を書くのも好きである。サッチャー首相に就職依頼の手紙を書いたこともある。“the Ministry of Transport advisor”にしてほしいというのである。現在のイギリスに一番欠けているものは、彼女の意見では‘Justice’である。彼女は熱烈な反共産主義者である。愛国者で保守党の支持者なのだが、自分の政党を作ると言い出したりもする。名付けてFidelis Party（信仰党？）と言う。また、国会議員に立候補すると言って、そのための書類をもらってきてくれとベネットに頼む。そして、もし当選したら、首相のMrs Thatcher同様、ダウニング街に住まなくてはいけないのかと心配したりする。自分のバンから議会に通ってもいいのだろうか。しかし、彼女はその日のうちに立候補の取りやめを宣言する。少し前までは5人ほど投票してくれる人がいたが、今は2人だけになったからだと言う。その2人とはミス・シェパードとアラン・ベネットである。

ローマ法王に手紙を書いたこともある。彼女の好きな色はローマ法王の黄色であり、バンもいつでも黄色に塗っていた。

彼女が身の上話をすることは稀である。それでも、何かの折、何かいいことがあり、なごんだ気持ちにいるときには、自ら、過去のことを語ったりすることがある。

あるとき、英国鉄道の招待でデヴォンへ他の老人たちと週末に出かけたことがある。担当の人たちが自分たちに“Ladies and Gentlemen”と呼びかけてくれたことをうれしそうに話し、あちこち皆で回ったのはまるで映画のようで、その時にはあなたのことを思い出したとベネットに言う。彼女はベネットの仕事のことを知っている。ベネットもいっしょに行ってくれた人

たちがミス・シェパードにやさしくしてくれたのをうれしく思う。ベネットはこのときにほとんどはじめて彼女の笑顔を見た。彼女が彼の家の庭に住み着いてから2年がたっている。彼女は次にラジオで聞いたという話をする。神父になろうとすなれず、挫折感から乞食になった男の話で、彼女はそれを聞いて自分のことのように言ったと言う。ミス・シェパードは1、2度尼になろうとしたことがあり、修練女として修道院にしばらくいたが、そのうちに体をこわし、やめざるを得なくなった。そして、そのあとずっと長い間、自分は人生の落伍者のように感じていた。しかし、そんな考えはまちがいで、失敗などではなかったと今では考えている。“If I could have had more modern clothes, longer sleep and better air, possibly, I would have made it.”と言って昔語りをやめると、ミス・シェパードは週末の旅行のことを思い出して“A bit of spree. My spree.”と言うとぶつつりと話をやめてしまう。

また、あるとき、ベネットが仕事でYorkshireへ出かけていくときのことである。ミス・シェパードが突然どこかへドライブに行きたいと言う。ベネットがBristolはどうかと言うと彼女はブリストルには行ったことがあると言い出す。その帰り道はBathを通り、すばらしい町だと思った。特に“beautifully parked cars”に感銘を受けた。そのとき彼女が運転していたのは軍用車で、仕事はその軍用車をDerbyshireまで持っていくことだったと言う。大戦中のことである。“Actually I overdid it in the war”と彼女は言う。それでも40年たった今でもミス・シェパードは車と縁が切れずにいる。

そのうち、彼女も年のせいで体が弱くなってくる。杖が必要になり、そして車椅子を福祉関係のところからもらうことになる。彼女はじつは電動式の手押し車椅子がほしかった。なぜ自分はそれをもらえないのか——彼女は不満をベネットにぶつける。

MISS S: That boy over the road has one. Why not me?

ME: He can't walk.

MISS S: How does he know? He hasn't tried.

ME: Miss Shepherd, he has a spina bifida.

MISS S: Well, I was round-shouldered as a child. That may not be serious now, but it was quite serious then. I've gone through two wars, an infant in the first and not in full rations, in the ambulance in the second, besides being failed by the ATS. Why should old people be disregarded? (52-53)

ミス・シェパードの面目が躍如とした会話だが、結局、彼女は手動式の手押し車椅子をもらう。しかし、彼女の車椅子の乗り方はふつうとはちがう。手を使って車輪を回すのではなく、二本のステッキを地面に押し付けて車椅子と自分とを動かしていく。車椅子スキーである。彼女のひそかな楽しみは、近くの坂道を上のところまで誰かに押しやってもらい、その人がいなくなり、さらに誰も見ている人がいないことを確かめると、車椅子で一気に坂道を走りおろることである。その笑顔はベネットもうれしくなるほどである。このころミス・シェパードは76歳となっている。

1988年1月、ミス・シェパードの誕生日の翌日のことをベネットは次のように記している。I ask Miss S. if it was her birthday. She agrees guardedly. 'So you're seventy-seven.' 'Yes. How did you know?' 'I saw it once when you filled out the census form.' I give her a bottle of whisky, explaining that it's just to rub on. 'Oh. Thank you.' Pause. 'Mr Bennett. Don't

tell anybody.' 'About the whisky?' 'No. About my birthday.' Pause. 'Mr Bennett.' 'Yes?' 'About the whisky either.' (56-57)

劇作家ベネットとミス・シェパードがこのような会話ができるようになったのは、彼女がベネットの庭に住み着くようになって14年目のことである。この年には、ベネットは3月、4月、5月、そして9月と書き込みをしており、一年の記録回数としてはそれまでより格段に多い。そしてミス・シェパードも自分について語るが多くなっている。彼女は自分自身のことをどう思っているのかという微妙な話までもベネットにする。

それは、ミス・シェパードがバスの定期券を更新するために写真が入用になったときのことだった。おばあさんが、バスに乗っている、そして降りようとしたら定期券の期限が切れているのに気づく——これはとってもおもしろいコメディーだから、労せずして一財産作れるとミス・シェパードは言う。そして、自分は悲劇役者だったと言ったかと思うと今度は喜劇役者だったと言い出す。そして、手足が大きいこと、身長が高かったこと、人がよく自分にぶつかり転んでいやだったことなどを語るが、打ち明け話になりかかっていることに気がつき、ふっと口をつぐんでしまう。車椅子の中で両膝の間に手を入れ、頭には野球帽をかぶったままの話だったが、最後までにこりとしなかった。それでもこういうことをベネットに語れるようになったのである。しかし、もうミス・シェパードの時間はなくなりつつあった。

彼女の心臓が弱ってきていると思う——ミス・シェパードのところへときどき訪ねてくる福祉の女性がベネットに言う。一度病院できちんと検査してもらい、何もないとしてもどこかの施設に入ったほうがいい、というのがその女性の意見である。ミス・シェパードは体も前よりだいぶ不自由になってきている。病院に行くという話を最初は彼女はいやがった。また、施設にも行きたがらなかった。しかし、とうとう周囲の説得に折れ、病院に行くことにする。

1989年4月27日の朝、ミス・シェパードを救急車が迎えにくる。彼女は、もしあちらで気に入らなかつたらここにもどってきていいかと、担当の福祉の人に何度も確かめたあと、車椅子のまま救急車に乗せられていく。彼女の去ったあと、ベネットは悪臭を放つごみの山としか見えないバンの内部をのぞきこみながら、感慨にふける。いくら20年以上バンの中で生活していたといっても、風呂に入って清潔なシーツのベッドで寝るといふ暮らしを味わってしまえば、ミス・シェパードがこんなきたなくてむさくるしいところにもどってきたいなどということはまずありえないだろう。しばらくしたら花でも持って会いに行ってみよう。

ところが、その同じ日の午後2時半ごろ、ミス・シェパードはもどってきてしまう。体をきれいに洗ってもらい、清潔な衣服を着て、やせた足には病院用の白い靴下を履いている。いかにももどってきてうれしそうな顔をしながら、彼女は病院関係者の連絡先を書いた紙切れをベネットにわたし、バンの中に入って行く。ベネットは、劇場での仕事のため出かけなくてはならない。仕度をして出かけようとするするとバンのドアを中からミス・シェパードがたたたく。ベネットがバンのドアを開けると、中にはミス・シェパードがごみの山の上に真っ白のきれいなシーツを敷いて、その上に横になっている。ベネットに、自分はまた病院に連れて行かれるのかとしきりに心配する。いや、そんなことはない、好きなだけここにいていいとベネットが言ってドアを閉め、出かけようとする、また、彼女はドアをばんばんとやる。中から、かぼそい声でミス・シェパードが言う。“Mr Bennett, I'm sorry the van's in such a state. I haven't been to do any spring cleaning.”これがベネットの聞いた最後のことばだった。翌日、ミ

ス・シェパードはバンの中でそのまま死んでいた。庭木が太陽の光を浴びて輝く美しい日だった。死因は心臓麻痺であった。

不思議と言えば不思議だが、ミス・シェパードは死ぬ直前の日曜日にそれまでずっと行っていなかったミサに行っている。ベネットは、このことを記すとき、いかにも作り話のように聞こえるかもしれないが、事実そうなのだと言う。医者にそのことを話してみると、医者は、それは決してめずらしいことではない、自分も出会ったことがあると言ってくれる。読者にも、そのことを疑う理由はない。

ベネットは葬儀の準備をし、そのあいだ、ミス・シェパードを知っていた人たちと話をすることができた。そして彼は「彼女の死から葬儀までのあいだにこれまでの20年以上のことを知ることができた」。やはり、彼女は若い頃尼になるために修練女をやっていた（そのとき、指導をしてくれた、99歳になる尼も葬儀には来てくれた）。しかし、何回か試みて挫折し、修道院を出て行った。その理由は“too argumentative”だったからというのが彼女を知る尼たちの意見だった。若いころから一種の不応症があったのである。戦争中は、やはり軍に関係することをやっていて、彼女が運転していたのは救急車であることがわかる。近くで爆弾が爆発しひどいけがをした。彼女が変になったのはそのせいかもしれないと言う尼もいる。戦争が終わるとミス・シェパードは一時期精神病院に入っていた。しかし、何度か脱走を繰り返すうちに社会で生活する能力があるとされ、病院にはいなくていいことになったのだそうである。

そのあと、ミス・シェパードは交通事故にあう。これが彼女の人生を決定してしまう。彼女のバンの横にオートバイがぶつかり、運転していた人が死んでしまったのである。彼女の側に落ち度はなかったにもかかわらず、事故の現場から姿を消してしまったものだから、彼女は警察に追われる身となった。そこで彼女はすでに尼になるために名を変えていたのをさらに変え、それがミス・シェパードという名であった。そして何年か後、彼女は前に尼になろうとした修道院のあるカムデン・タウンに戻り、死ぬまでその修道院の近辺を離れることはなかったのである。

私たちはベネットのここまでの記録を読むと何かおごそかな思いを抱かずにはいられない。この常軌を逸した女性の尋常ならざる人生に、あらためて生きるということの意味を考えさせられる。ベネットがこの記録を“The Woman in the Van”ではなく“The Lady in the Van”とした理由がわかる気がする。ミス・シェパードという個性のじつにあざやかな、そして感銘深い刻印がここにはある。

しかし、この作品はミス・シェパードという人間の記録であるだけではない。じつは、もう一人の人物、つまり登場人物でもあり、記録者でもあるアラン・ベネットという人間の研究の書でもあるのだ。そして、このことこそが*The Lady in the Van*という作品を真にユニークなものとしているのである。

アラン・ベネットは、ミス・シェパードのために自分の家の前庭に小屋を作ってやったとき、次のように書いている。

In giving her sanctuary in my garden and landing myself with a tenancy that went on eventually for fifteen years I was never under any illusion that the impulse was purely charitable. And of course it made me furious that I had been driven to such a pass. But I wanted a quiet life as much as, and possibly more than, she did. In the garden she was at

least out of harm's way. (21)

私たちはベネットのこのことばをそのまま鵜呑みにはできないかもしれない。他人への親切を利己的な理由に結び付けて「照れ」を隠そうとしているという推測もできる。親切を売り物にすることほど嫌味なものはない。しかし、ここではまずベネットがこういうことをわざわざ書かずにいらなかった、ということが重要である。なぜか。ホームレスの人間を自分の前庭に親切心から引き入れた場合どうなるか。前庭だけで親切心は止まるだろうか。止まらないのではないか。親切心はよりいっそうのコミットメントを必ずや招くことになる。親切心は要注意である。だから、ベネットはここで自分の行為を親切心からではなく、あくまでも自分の心の平安のため、利己的な理由のためだと自分に言い聞かせているのである。そして、絶えずそのことばを自分に言い聞かせることによって親切心に歯止めをかけることによって、彼はミス・シェパードとの関係を何とか自分の制御下におこうとしているのである。

ベネットは、次のような言い方もしている。

When she could still manage stairs she did very occasionally use my loo, but I didn't encourage it; it was here, on the threshold of the toilet, that my charity stopped short. (29)

冷たいと言えば冷たいように響く。だが、こういう態度を取らなければ、ミス・シェパードを前庭に住み続けさせることはできないのである。

しかし、このように自分の立場を措定することは、どうしてもミス・シェパードを負の存在としてみようとすることになる。だから、たとえば、ミス・シェパードのバンがいかにかいどい糞尿臭を放ち、そのために自分だけでなく、近所の人や郵便配達人までもいやな思いをしているというような記述が少なからず出てくる。わざわざミス・シェパードに聞こえるように「尿の臭いがひどい」と言ったりすることもある。ベネットは、そういうことをわざわざ言っている自分にきわめて意識的である。“good Samaritan”ということばがある。ベネットは“good Samaritan”の役を演じながら、“good Samaritan”ではない自分の部分を絶えず醒めた目で見つめ続けているのだ。

ベネットは、最初から一つの線を引いてミス・シェパードとかわって来た。そして、その境界線があったればこそ、ミス・シェパードも15年もベネットの前庭に住むことができた。だが、その境界線はやはり境界線であることに変わりはなく、2人を隔てるものである。ミス・シェパードが、心臓麻痺で死んだ日、ベネットは、次のように書いている。

I am filled with remorse for my harsh conduct towards her though I know at the same time that it was not harsh. But still I never quite believed or chose to believe she was as ill as she was, and I regret too all the questions I never asked her. Not that she would have answered them. I have a strong impulse to stand at the gate and tell anyone who passes. (67-68)

それまで、比較的淡々と記録をしてきたベネットがここではきわめて感情的になっていて、読む者の胸を打つ。

*The Lady in the Van*の最後の部分は、“the lady”であるミス・シェパードが死んだあとの後日談である。ベネットは、ミス・シェパードが死の数ヶ月前インフルエンザになったとき、万一のためにバンの座席の下に貯金通帳や書類といっしょに置いておくからと封筒を見せたこ

とを思い出す。車のなかから封筒を見つけ出すと、そこには男の名前と電話番号が書いてある。連絡をしてみると、それはミス・シェパードの兄弟であった。会うこともできたので話を聞いた。新しいこともいくつかわかった。なかでも興味深かったのは、ミス・シェパードが少女だったころ才能あるピアニストであり、ピアニスト・作曲家として当時令名の高かったCortotにパリで師事していたことだった。プロになることをコルトーその人からすすめられたが、ミス・シェパードは尼になることを決心したため、そこで彼女の音楽歴も終わりとなったのだ。

たしかに、ミス・シェパードの人生は尋常ならざる人生だった。しかし、本当にその人生は私たちの人生とは無縁の、異常な人生だったのか。

ベネットは、ミス・シェパードの封筒を探すためにバンに入ったときに、がらくたとごみの山の中から意外なものを発見する。たとえば、台所用品の一式でまったく使っていないものがあった。それは、ベネットの母親が台所に置いていたものと同様のものであった。母親もまた、その道具は、置いておきはしたものの使うことはなかった。客が見るだけのために置いてあった。また、車の中には胡椒のセットがあった。小さい引き出しのたくさんついたりっばなセットだった。これも未使用だった。そして、これもベネットの母がまた持っていたものだった。人を招待したときのためにと母は食器棚のそばのところに麗々しく置いていたが、社交というものをほとんどしないベネット家では、とうとう使われることはなかった。また、ミス・シェパードはたくさんのトイレットペーパーも買い置きをしていた。ベネットの母もそうだった。こうしてベネットはバンの中を探っていけばいくほど、そのバンの中にある生活がベネットの育ててきた家のものときわめて似ていることに気がついていくのだった。母が求めていたものもミス・シェパードが求めていたものもじつはそれほどちがいはしなかったのである。しかし、それにしても表面上は何と相違していることだろう。

ミス・シェパードは、封筒の中には、兄弟の名前と電話番号を書いた紙だけしか入れていなかった。彼女が、なぜあのような人生を送るに至ったのか——それを書いて残したのではないかというベネットのかすかな期待はみごとに裏切られる。ミス・シェパードは最後まで自分を貫いたのである。そういう彼女の人生を思いながら、ベネットは小心翼翼たる我が人生を思わずにはいられない。

この*The Lady in the Van*の冒頭には、William Hazlitt の‘On the Knowledge of Character’からのことばが置かれている。

Good nature, or what is often considered as such, is the most selfish of all virtues: it is nine times out of ten mere indolence of disposition. (7)

このことばは決してミス・シェパードのために置かれたのではない。ベネットは自分のために置いたのである。この作品は、ミス・シェパードという個性の研究の書であるだけでなく、ベネットという劇作家の自己探求の書でもあるのだ。イギリスの文学は、チャーサー以来、性格の研究ということを大きな特徴とするが、このベネットの小品は、そのイギリス文学の本流に棹さず、新たな達成である。<sup>(3)</sup>



## 注

- (1) *The Lady in the Van*は最初は*London Review of Books*に1989年に掲載された。それが本となって出るのは、1994年に出た*Writing Home*においてである。後にそれが独立した単行本として1999年に出ている。彼は、このノンフィクションを戯曲化し、それは1999年11月19日にロンドンのQueen's Theaterで初演となった。戯曲化されたものは2000年にFaber and Faberから単行本として出版された。
- (2) 以下、引用はすべてProfile Booksからである。
- (3) この作品はベネットの作家としてのキャリアにも大きな影響を与えたと思われる。つまり、この作品は小説家ベネットを生み出すことになったのではないか。下にあげた3つの作品——*The Clothes They Stood Up In*, *Father! Father! Burning Bright*, *The Laying on of Hands*——はいずれも新しい興味の中編小説で、新境地と言っている。

## 引用文献

Bennett, Alan. *The Lady in the Van*: London: Profile Books, 1999

## 参考文献

Bennett, Alan. *Alan Bennett: Plays 1*. London: Faber and Faber, 1996

———. *Alan Bennett: Plays 2*. London: Faber and Faber, 1998

———. *The Clothes They Stood Up In*. London: Profile Books, 1998

———. *Father! Father! Burning Bright*. London: Profile Books, 2000

———. *The Lady in the Van*. London: Faber and Faber, 2000

———. *The Laying on of Hands*. London: Profile Books, 2001

———. *Writing Home*. London: Faber and Faber, 1994

Games, Alexander. *Backing into the Limelight: The Biography of Alan Bennett*. London: Headline Book Publishing, 2002

Turner, Daphne. *Alan Bennett: In a Manner of Speaking*. London: Faber and Faber, 1997